

に於てまた之を論述された。今此等の二篇を王氏の所論と對比して見るに、もとより據る所に於て多少の相違はあり、枝葉の問題について見解の異なる所は免かれないが、大體の上に於て酷似するものであつて、其の結論としては三者ともに阻鞞・阻卜を以て韃靼・塔々兒と同一のもの、前者は後者の別名であるとするに於て一致し、ただ松井氏が大事を取つて其の斷定を避けようとしたのみである。そうして此等の結論は高寶銓が元祕史李注補正に阻鞞は即ち塔々兒であると見たのを確かむることになつたものに外ならぬ。かゝる次第で阻卜と韃靼とを同體異名とすることは決して新しい見解ではないが、獨り何故に韃靼を阻卜とか阻鞞とかいふに至つたかの解釋を試みたものは無いやうで、之は全く王氏の見解を以て先驅とし従つて此の一篇中、最も價值を認めらるべき條である。氏のこれについての解釋はこゝに紹介したやうに透徹したもので、穿鑿の妙を得たものといふべきであらう。たゞ觀過する事の出来ないのは氏が極めて精細に諸史を涉獵して、其の結果韃靼年表までも添附されたものと思はれるにも拘はらず、遼史太祖本紀神冊三年「二月達旦國來聘」とか、また同史聖宗本紀統和二十三年六月「己亥達旦國九部遣使來聘」とかいふ記事に無頓着で此等を年表中に加へようともせず、遼史には僅に一度達旦なる文字があるとか、遼史聖宗紀の一處のみに尙達旦の字を存して居るとか述べてある事で、然も此の事は前に記したやうに「蓋史臣所未及改、抑故留此間隙、以待後人之考定者也」とまでいうてあるのである。達旦、韃靼等の文字が遼金史中にこれより外に存しないという事が議論の根底を爲して居るのに、比較的僅少の紙數に過ぎない遼史本紀の文中に於てすら、かゝる失檢があるならば、爾餘の部に於て果して論者のいう如くであるか否か疑はしいというやうな非難を招かぬとも限るまい。然しながら此の如きは固とより白璧の微瑕で何人にも免がれぬ所であり、そうして此等の